

10年を振り返り、いまを知る

読み切り
特集

ドライブレコーダー 十年史

ドライブレコーダーはこの10年、カーエレクトロニクスの中でもっとも注目を集めるものの1つであり続けてきた。だからこそ常に変化と進化を繰り返し、機能を成長・熟成させてきた。ここではその歴史を振り返り、それを踏まえて最新機種だからこそその強みと旨味を明らかにする。

社会的事件をきっかけに この10年で大きく進化!

**誕生したのは二十年前
しかしなかなか浸透せず…**

ドライブレコーダーはこの10年で大きく進化したのだが、その内容を分析するその前に、誕生から普及までの経過を振り返っておきたい。

まず、これが日本にて初登場したのは、ちょうど20年前の2003年だ。日本交通事故鑑識研究所から発売され、まずはタクシーに装着される。その後は他社からも発売され、トラックへも普及が広がった。

コンシューマ向けの製品は2006年に登場し、2008年には自動車メーカーによりディーラーオプション販売も開始された。

しかし、一般ドライバーにはなかなか浸透しなかった。初期のモデルは本体が缶コーヒーくらいの高さがあり邪魔になりがちで、価格も高かった。また、撮影した映像が事故時に証拠として役立つのかも不透明。これらを理由に、普及は進まなかったという。

しかし2012年にとある事件をきっかけとして注目度が高まる。それは、京都の祇園で発生した軽自動車の暴走事故だ。その被害者となったタクシーのドラレコに記録された

映像がテレビのワイドショーで何度も流され、ドラレコの認知が広まった。そしてこの頃からさまざまなメーカーが市場に参入するようになり、装着率は上がりだす。

とはいえその上昇カーブはまだ緩やかだった。これがあれば事故の被害に遭ったときに役立つことは理解されつつも、自身にも過失があった場合それも記録として残る。そこに懸念を感じるドライバーも少なくなかった。つまり、自身を守るためのものという認識が今ほど広まっていなかった。

だが、またもや事故や事件をきっかけに状況が変化する。2017年に東名高速であり運転をきっかけとする夫婦死亡事故が、2019年には常磐道あり運転事件が起こる。そうしてあり運転が社会問題としてクローズアップされ、身を守るためにドラレコが必要、そう考えるドライバーが一気に増えた。

というわけでドラレコの装着率はこの10年で、さらにいえば特にこの5年でぐっと上がった。さて、それに伴い機器の形態はどう移り変わり、性能はどのように進化してきたのか。その詳細は次ページ以降で解説していく。